

- 最終講義 -

la Madonna del parto

産婦人科学教授 河 野 一 郎

川崎医大に赴任して以来16年間、産婦人科学関連の講義には随分時間を費やしてきましたが、今日は最終講義ということでわがまをさせていただき、産婦人科学とも国家試験とも医学研究とも関係のない、肩のこらない話に終始することをお許しいただきたいと思います。

はるか昔、私たちが医学生であった頃、医学特に解剖学の講義が始まると身体の各部分の名称をドイツ語、ラテン語で覚えることに熱中しました。お互い医学生同士の会話の中にそれらの単語が頻繁に出てきて、そうすることが無性に楽しく、雰囲気だけは医学を学んでいるということを実感したものでした。英語とドイツ語は一般教養で曲がりなりにも授業がありました。ラテン語は医学用語を通して自分流に習ったに過ぎません。外国語というものが将来どうかかわってくるのか、特に意識したことはありませんでしたが、そのとき覚えた言葉は今も十分に役立っております。

現在川崎医大での講義、実習指導などの場合に使用する外国語はもっぱら英語に限られております。私は5年生の実習後に行なう口頭試問でその題目を英語で聞くことにしておりました。川崎医大の学生には英語に非常に堪能な人とまったくその反対の人がおり、どちらかといえば後者が多いように思います。しかし英語がわからないのではなく、なぜか横文字に強い拒絶反応を示す人が多く、はなから覚えようとしてくれないのです。世の中には本学の植木学長のようにドイツ語が何の抵抗もなくしゃべれる方もいれば、私のように英語さえ満足に話せない者もおります。外国語を完全にマスターする

のに越したことはありませんが、ほんの少し聞きかじりするだけでも十分異文化に触れることができ、そこから人生の調味料を得て、楽しい気持ちになれるということを一枚の絵との不思議な出会いを通じてお話したいと思います。

私は川崎医大に赴任してくる前にヨーロッパで4か所の施設に留学していましたが、留学先をドイツからイタリアへ移る際、少し時間を作って以前から行きたかったイタリアのトスカーナとウンブリア地方を旅しました。もちろんイタリアを訪ねるのはこの時が初めてでした。ドイツからオーストリアを経て、車で雪の残るブレンナー峠を越えてイタリアへ入りました。2月でしたがイタリアはすでに陽春でした。フィレンツェで数日を過ごし、アッシジにやってきました。アッシジはペルージャの近くのスバシオ山の山麓の丘の上にある聖フランチェスコゆかりの聖地で、運良く聖フランチェスコ聖堂の前にあるホテルで聖堂の正面を見下ろせる部屋を取ることができました。この聖堂は数年前に地震で中にあるジオットの描いた聖フランチェスコの一代記の壁画とともにかなりの損壊を受けましたが、現在は元通りに修復されているということです。その夜レストランで食事をしてホテルの階段を昇っていた時でした。階段の踊り場に貼られていた全紙大のポスターが目に入りました。お腹の大きな女性とその左右に天使のようなものが描かれ、原画はフレスコ画のように思いました。落ち着いた色調と女性の表情に何か惹かれるものを感じました。下の方に文字が書かれており、Monterchi (Arezzo-Italia), Piero della Francesca, La Madonna del

parto, Capella presso il cimiteroなどの文字が目に入りました。まずモンテルキはそのあとのカッコ内にアレツォ、イタリアとあるので地名と思われましたが、しかしその時持っていた地図の中にその地名は載っていませんでした。次にピエロ・デッラ・フランチェスカというのは画家の名前であることは前々日にフィレンツェのウフィツィ美術館でこの画家の作品を見ていたのですぐわかりました。ラ・マドンナと定冠詞がついて大文字で始まればもちろん聖母マリア様のことで、partoはラテン語で分娩を意味するpartusから来たとすれば、これが絵の題名で、＜分娩に臨む聖母マリア＞という意味ではないかと勝手な解釈をしました。すなわちこの絵にはこれからお産をしようとしているマリア様とそれを助ける天使が描かれているのではないかと思われました。最後のCapella以下はよくわかりませんでした。普通ヨーロッパでよく目にするマリア様を描いた宗教画というのはほとんどが受胎告知か、幼子キリストを抱いた聖母子像であり、お腹の大きなマリア様を描いたものは大変珍しいと思いました。ピエロ・デッラ・フランチェスカも＜セニガッリアの聖母＞という美しい聖母子像を描いております。そしてこの絵をよく見ているうちに何とかして本物を見たいと思うようになり、ホテルの人に本物がどこにあるのか聞いてみました。が誰も知りませんでした。

町の雰囲気もレストランもアッシジは大変気に入りました。予定を変更してもう一泊し、アッシジを堪能してからシエナに行きました。シエナの町を散歩していて立ち寄った本屋さんでまた一冊の画集を見つけました。ピエロ・デッラ・フランチェスカの画集で、表紙にはフィレンツェのウフィツィ美術館で見たウルビーノの大公の肖像画が使われていました。イタリア語のほかにドイツ語の本もあったのでドイツ語のほうを買いました。夜ホテルの部屋でこの画集に書かれたドイツ語を苦勞して拾い読みしたところ、アレツォ市の聖フランチェスコ教会にはピエロ・デッラ・フランチェスカの

描いたフレスコ画が沢山あること、アレツォの近くにあるサンセポルクロという町がピエロの出生地でその市立美術館にも彼の作品が沢山あることなどがわかってきました。そこでここまで来たからには観光地を巡るのを止め、以後の旅程を変更してピエロ・デッラ・フランチェスカの絵を訪ねて歩くことにしました。そのあたりをウロウロしているとそのうちにお腹の大きなマリア様の絵にもどこかでお目にかかれるだろうと期待しました。

シエナから東へ75kmのところにあるアレツォは丘の上の城壁に囲まれた一帯の中心地で、古色蒼然とした聖フランチェスコ教会は町の真ん中にありました。教会の後陣の壁画いっばいに描かれた絵はまさにピエロの絵で、描かれて500年以上になりますが鮮やかな色彩は十分保たれていました。しかしこの壁画はキリストを磔にした十字架はいったいどれかという聖十字架伝説を一連の物語にしたもので、あのマリア様の絵はありませんでした。アレツォの東38kmにあるサンセポルクロはトスカナ地方の東端で、そこへ行く途中の分かれ道のところでとうとう右へ行くとモンテルキと書いた、小さな道案内を見つけました。モンテルキというのはやはり地名でした。しかし当初の目標通り、とりあえずサンセポルクロへ向かいました。サンセポルクロというのはのんびりとした田舎町で、さすがにピエロの生まれたところということで彼の銅像が立っていました。市立美術館には＜慈悲の聖母＞や＜復活のキリスト＞など有名なピエロの作品がたくさんありましたが、あのマリア様はありませんでした。美術館の係員に確認したところ、モンテルキというのはピエロのお母さんの里で、そこに間違いなく例の絵があるということでした。サンセポルクロからの帰り道を途中で左に曲がり、はやる心で田舎道を急ぎましたがいくら行ってもそれらしい場所には着きません。どうやら行過ぎていたようで、今度はゆっくりと注意深く引き返してくるとMadonna del Partoと書かれた小さな板切れが目に入りました。指示に従って

並木道を登ってゆくと小さなお堂がありました。お堂の裏は墓地になっていました。看板も掲示板もないのでまさかこんな所にと、通り過ぎようとしたが念のためにお堂の中をのぞいてみたら……マリア様がおられました。まさにポスターに書いてあった通りで、Cappella presso il cimitero というのは墓地の傍の礼拝堂という意味でした。

小さくて狭いお堂の中には壁ごと剥がしたフレスコ画が一つだけ架かっていました。管理人のおばさんが一人いて、500リラ支払うとあまり明るくないライトを点灯してくれました。同行した妻と私は思わず同じ言葉をつぶやきました。……随分探しましたよ。遠い道のりをやってきました。でもお会いできてよかった。……

せり出したお腹のために青いドレスの前を一部はだけてマリア様は立っていました。右手は優しくお腹の中の子供を撫でるかのようには添えられていました。東洋的ともみえる顔立ちは落ち着いていて、これから始まろうとするお産にいささかの不安も抱いていないようでした。産

科医である私は世の中のすべての妊婦さんに安産のお守りとしてこの絵を見せてあげたいと思いました。

さて小旅行を終えミラノに落ち着いて数週間が過ぎました。私の留学先は日本流に言えば国立ミラノがん研究所およびその付属病院ともいえますが、ある日仕事が早く済んだので帰りに繁華街のほうへ出てみました。ミラノの繁華街は有名なドウオーモを中心にして広がっていますが、ドウオーモへ通じるヴィットリオ・エマヌエル二世通りを歩いていると、そこにある教会の前庭に今まで見たことのないプレハブの小さな小屋ができておりました。何をしているのだろうと中をのぞいてみてビックリしました。なんとモンテルキにあるはずの Madonna del parto が展示されているではありませんか。なぜマドンナがそこにあるのか聞いてみましたが、英語のわかる係員がおらず、その時はわかりませんでした。今になって考えてみるとこの絵を大切に保存するための資金を街頭で募金していたのではないかと思います。おかげでその時にアッシジのホテルで見たのとまったく同じポスターを購入することができ、そのポスターは川崎医大の私の居室に私の任期中ずーっと架けておりました。そのおかげかどうか何とか大事に至らず今日を迎えることができました。ちなみに現在はこの絵は募金の成果があったのか、きれいに修復されて村の立派な建物の中でケースに納められているというのを聞きました。ともあれ1か月ほど街中の仮小屋に置かれていたので、その後何度も町へ出るたびにこの絵を見る機会に恵まれ、散々苦勞して田舎の方まで行ったのがうそのように思われました。

ついでながらミラノにいる時に大きな感動を受けた作品がもう一つありますので紹介したいと思います。ミラノにはご存知のようにサンタ・マリア・デッレ・グラツイエ教会にあるダ・ヴィンチの＜最後の晩餐＞やブレラ美術館にはピエロ・デッラ・フランチェスカの＜莊嚴の聖母＞という作品もあります。しかし私が最も深い感銘を受けたのがスフォルツァ城の中の



美術館にあるピエタです。処刑されたキリストを抱くマリア様を描いたり、彫ったりしたものをピエタといますが、ミラノにあるのはミケランジェロが死の直前までノミを振るっていたが遂に未完成のまま残された<ロンダニーニのピエタ>といわれるものです。ミケランジェロのピエタはヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂とフィレンツェの大聖堂にもありますのでよくご存知のことと思います。ほかのピエタは完成度が高く、またマリア様がキリストの死を神の子の死として従容として、穏やかに受け止めているように見えますが、この荒削りのロンダニーニのピエタではわが子を亡くした母親の慟哭が、オイオイと泣いている泣き声が聞こえてくるような気がしました。荒々しいノミの跡から伝わってくる直截な感動は日本の円空の仏像にも通じるものがあるように思いました。

さてそれから数か月がたって、その時オーストリアのグラーツの大学に滞在していた私はローマでの国際学会に出席するために再びイタリアの地を踏むことになりました。学会を終えてローマからの帰り道で、この前のときには行くことが出来なかったイタリアの各地に寄りな

がら帰ることにしました。山の上に広がる山岳都市など面白い所がたくさんあり、寄り道するところが多くてちょっとゆっくりし過ぎたので、高速道路を使って先を急ぐことにしました。田舎道を高速道路のある方向へドライブしてましたら、いつの間にか何となく見たことのある景色の中にいました。知らぬ間にあのモンテルキへ、以前に来たときとは逆の方向から入り込んでいたのです。不思議な縁に引かれて小さい礼拝堂の中のマリア様に3度目のご挨拶をすることになりました。ミラノの雑踏を逃れてマリア様は無事里帰りしていました。

Madonna del parto という一枚の絵との出会いがあったことからこの時の私たちのイタリアの旅は大変印象深いものとなりました。またその絵を描いたピエロ・デッラ・フランチェスカという画家の存在を知ることになり、今では彼の熱烈なファンとなってしまいました。外国の文化に触れる楽しみということを学生の皆さんにわかってもらいたいと外国旅行を例に挙げてお話をさせていただきました。外国語を毛嫌いせず、ぜひ親しんでいただきたいと思います。

略 歴

昭和15年4月26日生

本 籍 香川県



学 歴	昭和41年	岡山大学医学部卒業
	昭和42年	医学に関する臨床実地修練修了
	昭和49年	医学博士（岡山大学）
	平成元年－2年	文部省在外研究員としてドイツ エルランゲン・ニュルンベルグ大学ほかへ出張
職 歴	昭和44年	坂出市立病院産婦人科医長
	昭和46年	川崎病院産婦人科医長
	昭和51年	岡山大学医学部助手（付属病院産婦人科）
	昭和58年	岡山大学講師
	平成2年	川崎医科大学教授、現在に至る
資 格	昭和42年	医籍登録 第193568号
	昭和62年	日本産科婦人科学会専門医 No.19686000-N8702
	平成13年	日本癌治療学会臨床試験登録医
	平成17年	日本婦人科腫瘍学会暫定指導医
役職（1）	日本産科婦人科学会関係	
	平成2年－現在（通算16年）	評議員、代議員
	平成2年－現在（通算16年）	中国四国合同地方部会理事
	平成13年－平成17年（通算4年）	腫瘍委員会委員、小委員長
役職（2）	その他	
	日本産婦人科手術学会理事	
	婦人科悪性腫瘍化学療法研究機構理事	
	SGSG 婦人科腫瘍研究グループ代表	
受 賞	平成17年	岡山県がん征圧事業功労感謝状
著 書	卵巣腫瘍のマネージメント など	